

4 防除対策

【本田での対策】

(1) 県南地域の罹病性品種（コンヒカリ等）に対して、6月下旬～7月上旬に本ウイルスを媒介するヒメトビウンカの本田防除を行う。なお、箱施用剤を使用した場合は本田防除を行う場合は、同一系統・薬剤の連用を避ける。

表2 ウンカ類に登録のある主な農薬（平成25年6月10日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期/本剤の使用回数
アドマイヤー1粒剤	3kg/10a	収穫7日前まで/2回以内
アドマイヤー水和剤	2000倍	収穫7日前まで/2回以内
スタークル1キロH粒剤	1kg/10a	収穫7日前まで/3回以内
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで/3回以内
MR、ジョーカーEW	2000倍	収穫14日前まで/2回以内
トレボンEW	1000倍	収穫21日前まで/3回以内

【次年産に向けての対策】

- (1) 再生稲はヒメトビウンカの個体数の増加や、発病株をヒメトビウンカが吸汁して保毒虫率を高める恐れがあるため、収穫終了後は速やかに耕起をする。
- (2) 抵抗性品種（とちぎの星等）を作付する。近年増加している餌料イネも、抵抗性品種（クサホナミ、はまさり等）に切り替える。

詳しくは、農業環境指導センターまでお問い合わせください。  
TEL 028-626-3086  
http://www.jppn.ne.jp/tochigi/

平成25年度 病害虫発生予察注意報 第1号

平成25年6月17日  
栃木県農業環境指導センター

作物名：水稲  
病害虫名：イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ媒介）

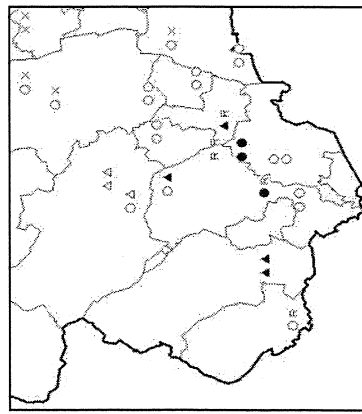
- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県南地域
- 3 注意報発表の根拠

- (1) イネ縞葉枯病は年々増加しており、県南地域では昨年の黄熟期に要防除水準（発生株率10%）を超える地点が複数見られた（図1）。
- (2) ウンカ類幼虫の越冬前密度調査では、県平均60.6頭/10㎡（平年比312.2%）と多い状況だった。
- (3) 平成25年5月下旬～6月上旬にヒメトビウンカ第1世代幼虫を採集し、イネ縞葉枯病ウイルス保毒虫をエライザ法で検定した結果、保毒虫率が県平均5.3%と過去2年に比較して非常に高くなった。また、県南地域では保毒虫率10%以上の高い地点が複数見られた（表1）。

表1 ヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移(%)

地点名	H23	H24	H25
県北	0.0	1.8	0.9
大田原市短畑	0.0	0.0	0.0
那須烏山市大楠	0.0	0.0	0.0
高根沢町花園	0.9	0.9	0.9
芳賀町西高橋	0.0	0.0	0.0
真岡市善田	1.8	2.7	9.1
宇都宮市芦沼町	0.9	0.9	1.8
上三川町上三川	0.9	0.9	0.9
鹿沼市湯野谷	1.8	1.8	0.0
下野市小金井	0.9	1.8	10.0
小山市下石塚	5.5	5.5	5.5
小山市小袋	5.5	8.2	12.7
小山市石ノ上	2.7	3.6	8.2
小山市栗川	9.1	2.7	7.3
壬生町助谷	0.0	0.9	2.7
栃本市鶴社町	1.8	0.9	2.7
栃本市大平町真弓	5.8	4.5	7.3
栃本市藤岡町菅吉	1.8	1.8	1.8
栃本市藤岡町笹沼	3.6	3.6	12.7
佐野市小中町又は並木町	0.9	0.0	1.8
足利市高松町	0.9	2.3	1.8
県平均	2.3	0.0	5.3

注：検定サンプルは5月下旬～6月上旬に、美郷ほ場から採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫  
検定方法：DAS-ELISA法 検定数：11.0頭/1地点  
ただし、H25年の栃本市大平町真弓は3ほ場平均



程度	無	散見	少	中・多	甚
発生株率(%)	0	1未満	1~10	11~20	21以上
記号	○	□	△	▲	◆

図1 黄熟期のイネ縞葉枯病発生状況  
（平成24年8月下旬～9月上旬 県中南部抜粋）  
※要防除水準：発生株率10%以上（▲、◆）

## 平成25年度 病害虫発生予察注意報 第2号

平成25年7月19日  
栃木県農業環境指導センター

作物名：水稲

病害虫名：斑点カメムシ類

- 1 発生予想 発生量 多い
- 2 発生地域 県内全域
- 3 注意報発表の根拠

- (1) 7月中旬に県内33地点のイネ科雑草地等でのすくい取り調査を行った結果、全ての地点で斑点カメムシ類の発生が認められ、発生虫数も平年より多い(表1)。特に、アカスジカスミカメ(図1)の発生(平年比41.4%)が極めて多い。
- (2) 気象庁発表の関東甲信地方1か月予報(7月12日発表)によると、晴れの日が多く、高温で推移する見込みで、斑点カメムシ類の活動、繁殖に適している。

表1 イネ科雑草地における斑点カメムシ類成虫の発生状況(20回振りすくい取り虫数)

	発生種の内訳			
	クモヘリカメムシ 成虫	ホソハリカメムシ 成虫	アカヒゲホソドリ カスミカメ成虫	アカスジカスミカメ 成虫
H25	209.9	12.0	6.1	65.0
平年	90.2	31.5	2.9	25.3
対平年比(%)	233	38	210	257
発生概評	多	やや少	多	多

※本年は7月10～11日に33地点で20回振りすくい取り調査を実施。  
※平年値は平成15年～24年の10年間の平均値(調査時期7月中旬)。

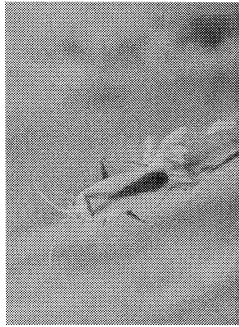


図1 アカスジカスミカメ成虫



図2 アカヒゲホソドリカスミカメ成虫

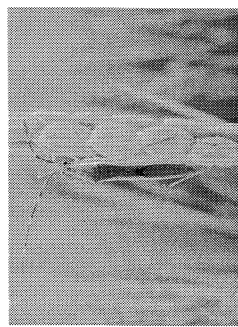


図3 クモヘリカメムシ成虫

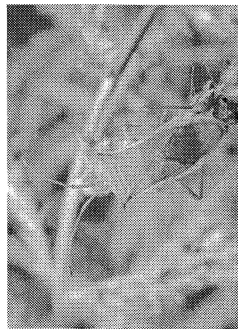


図4 ホソハリカメムシ成虫

## ◎防除対策

### ○耕種的防除 (病害虫防除対策のポイント：斑点カメムシ類の防除対策を参照)

- ・水田内にイネ科雑草などが残っている場合は、斑点カメムシ類を誘引するので除去する。
- ・水稲出穂2～3週間前に行う1回目の水田周辺の除草が済んでいる場合には、2回目の除草を水稲の出穂期頃(除草したイネ科雑草が出穂する前)に行う。
- ・水稲出穂2～3週間前の1回目の除草が実施できていない場合は、遅くとも水稲の出穂期10日前までに除草を行い、出穂期頃の除草は避ける。
- ・本年は、平年に比べ、出穂期が早まる可能性があるため生育診断情報を確認の上、水田周辺雑草の除草時期に注意する。

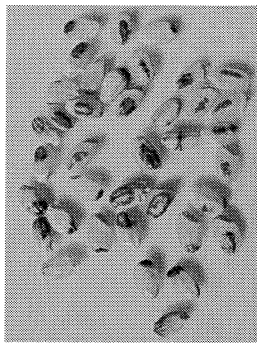


図5 斑点カメムシ類による被害粒

## ○薬剤防除

- ・穂揃期に斑点カメムシ類が水田内で見られる場合は、液剤・粉剤ならば熟初期(出穂期7～10日後)まで、粒剤ならば出穂期～出穂期7日後までに防除する。
- ・その後も斑点カメムシ類が見られる際は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行う。

表2 水稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤(平成25年度7月16日現在)

薬剤名	希釈倍数又は使用量	使用時期/使用回数
スタークル1キロH粒剤	1kg/10a	収穫7日前まで/3回以内
スタークルメイト1キロH粒剤		
ダントツ粒剤	3～4kg/10a	収穫7日前まで/3回以内
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで/3回以内
スタークルメイト液剤10		
MR. ジョーカーEW	2000倍	収穫14日前まで/2回以内
キラップフロアブル	1000～2000倍	収穫14日前まで/2回以内
キラップ粉剤DL	3～4kg/10a	収穫14日前まで/2回以内
スミチオン乳剤	1000倍	収穫21日前まで/2回以内
スミチオン粉剤3DL	3～4kg/10a	収穫21日前まで/2回以内※1
トレボンEW	1000倍	収穫21日前まで/3回以内

※1 但し、出穂前は1回

詳細は、農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) までお問合せ下さい。  
病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi\_nouse)」でも発信中です。

(TEL 028-626-3086)